

中等國語三

文部省

文部省調查及發行課寄贈

〔前〕 ¥ .50

(11)

K240.8

1a

目録

國文篇

六 固有の偉大さ	十四
一	二
三	六
十	十

昭和二十一年三月二十日印刷 同日翻刻印刷
昭和二十一年三月三十日發行 同日翻刻發行
〔昭和二十一年三月三十日 文部省検査済〕

著作権所有

著者
發行

文 部 省

翻刻發行者

東京都神田區岩本町三番地
中等學校教科書株式會社

代表者 龜井 實 博

東京都牛久保市春日町一丁目十二番地

大日本印刷株式會社

代表者 佐久間 長吉郎

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE Mar. 26, 1946)

印刷者

國文篇

若 菜

古今和歌集



て若菜摘みてむ
わが宿の池の藤波さきにけり山ほとけさすいづ
か来鳴かむ

はちすの露を見て詠める 僧 正 遍 昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を
玉とあざむく

惟翁親王の許にまかりかよひけるを、かしらお
ろして小野といふ所に侍りけるに、正月にとぶ
らはむとてまかりたりけるに、比叡の山の麓な
りければ雪いと深かりけり。しひでかの室にま
かりいたりてをがみけるに、つれづれとしてい
ともの悲しくて歸りまうできて詠みておくりけ
る

在原 業 平

忘れては夢かどぞおもふ思ひきや雪ふみわけて
君を見むとは

初瀬に詣づることに宿りける人の家に久しく宿
らでほどへてのちにいたれりければ、かの家の
あるじかくさだかなむ宿りはあるといひ出し
て侍りければ、そこに立てりける梅の花を折り
て詠める 紀 貫 之

人はいさ心もしらずふるさとは花をむかしの香
にほひける

歌奉れと仰せられし時に詠みて奉れる
櫻花咲きにけらしなあしひきの山のかひより見
ゆる白雲

池のほとりにて紅葉の散るを詠める

凡河内 躬 恒

風ふけばおつるもみち葉水きよみ散らぬ影さへ
底に見えつゝ

内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十の賀しける
時に四季の繪かける後の屏風にかきたりける歌

秋

住の江の松を秋風ふくからにこゑうちそふるお
きつ白波

是貞親王の家の歌合の歌 紀 友 則

露ながら折りてかささむ菊の花老いせぬ秋の久
しかるべく

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

壬 生 忠 岑

みよしの山の白雪ふみわけて入りにし人の音
づれもせぬ

題知らず

よみ人知らず

わたつみの濱のまさごを數へつゝ君が千年のあ
りかずにせむ

とりものの歌

み山には巖ふるらし外山なるまさきのかづら色
づきにけり

二 やまとうた

紀 貫 之

やまとうたは、人の心をたねとして、よろづの言の

至るまで、又、鶴龜につけて君を思ひ、人をも祝ひ、
逢坂山に到りて手向けを祈り、あるは、春夏秋冬にも
入らぬくさくの歌をなん撰はせ給ひける。總べて千
歌、二十卷、名づけて古今和歌集といふ。

三

かくこのたひ集め撰ばれて、山下水の絶えず、濱の
眞砂の數多く積りぬれば、今は飛鳥川の潮になるうら
みも聞えず、さぐれ石の巖となる喜びのみぞあるべき。
それ、まゐら、ことばは春の花匂ひ少くして、空しき
名のみ秋の夜の長きをかてれば、かつは人の耳にお
そり、かつは歌の心にはちて思へど、たなびく雲のた
ちぬ、鳴く鹿のおきふしは、貫之らがこの世に同じく
生まれて、この事の時にあへるをなん喜びぬる。人麻
呂亡くなりたれど、歌のこととまされるかな。たと
ひ、時移り、事去り、樂しび悲しび行き交ふとも、こ
の歌のもし、青柳の絲絶えず、松の葉の散り失せずし
て、まさきのかづら長く傳はり、鳥の跡久しくとま
れらば、歌のさまをも知り、ことの心をも得たらん人

葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげき
ものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつ
けて言ひ出せるなり。花に鳴くうぐひす、水にすむか
はづの聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌
を詠まざりける。

二

今、すべらぎの天の下知ろしめすこと、四つの時、
九かへりになんなりぬる。あまねき御慈しみの波、や
しまのほかまで流れ、ひろき御恵みのかけ、筑波山の
麓よりもしげくおはしまして、よろづのまつりごとを
開しめすいとま、もろくの事をすて給はぬあまりに、
いにしへのことをも忘れじ、よりにしことをも興し給
ふとて、今もみそなはし、後の世にも傳はれとて、延
喜五年四月十八日に、大内記紀友則・御書所預紀貫
之・前甲斐少目凡河内躬恒・右衛門府生壬生忠岑らに
仰せられて、萬葉集に入らぬ古き歌、みづからのをも
奉らしめ給ひてなん。それが中に、梅をかざすより始
めて、ほとへぎすを聞き、もみちを折り、雪を見るに

は、大空の月を見るが如くに、いにしへを仰ぎて今を
こひざらめかも。

三 春は曙

枕 草 子

春は曙。やう／＼白くなり行く山きは少し明かり
て、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月の頃は更なり。闇もなほ、螢飛びちがひ
たる。雨などの降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山のはいと近く
なりたるに、鳥の寝どころへ行くとて、三つ四つ二つ
など飛び行くさへあはれなり。まいて、雁などのつら
ねたるがいと小さく見ゆる、いとをかし。日入り果て
て、風の音蟲のねなど、いとあはれなり。

冬はつとめて。雪の降りたるは、言ふべきにもあら
ず。霜などのいと白く、又、さらでもいと寒きに、火
など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつき／＼し。
晝になりて、ぬるくゆるびもて行けば、炭櫃・火桶の
火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

る折りさやうにをあるかし。

正月十日、空いと暗う、雲も厚く見えながら、さすがに、日はいとけさやかに照りたるに、えせ者の家のうしろ、荒島などいふものの、土もうるはしうなほからぬに、桃の木若だちて、いとしもとがちに差し出でたる、片つ方は青く、いま片つ方は濃くつや／＼かにて、蘇枋のやうに見えたるに、細やかなる童の狩衣はかけやりなどして、髪はうるはしきが登りたれば、又、紅梅の衣白きなど、引きはこえたる男児、靴はきたる、木のもとに立ちて、「われによき木切りて、いで。」など乞ふに、又、髪をかしげなるわらはべの祖ども綻びがちにて、袴は萎えたれど、色などよき打ち着たる、三四人、「卯榎の木のよからを切りておろせ。こゝに召すぞ。」など言ひて、おろしたれば、走り交ひ、取りわき、「われに多く。」など言ふこそをかしけれ。黒き袴着たる男走り来て乞ふに、「待て。」など言へば、木のもとに寄りて引きゆるがすに、危ふがりて、猿のやうにかいつきてをるもをかし。梅などのなりた

ふに、ふとはづれて過ぎぬるもくちをし。蓬の車に押しひしがれたるが、輪の舞ひ立ちたるに、近うかいへたる香もいとをかし。

五

九月ばかり、夜一夜降り明かしたる雨の、今朝はやみて、朝日のはなやかにさしたるに、前栽の菊の露、こぼるゝばかり濡れかゝりたるも、いとをかし。透垣、縁文、すゝきなどの上にかいたる蜘蛛の巣のこぼれ残りて、ところどころに絲も絶えさまに雨のかゝりたるが、白き玉を貫ぬきたるやうなるこそ、いみじうあられにをかしけれ。

少し日闇けぬれば、萩などのいと重けなりつるに、露の落つるに枝打ち動きて、人も手觸れぬに、ふとかみさまへ上りたる、いみじうをかしと言ひたる、こと人の心地にはつゆをかしからじと思ふこそ、又をかしけれ。

六

四月の晦日に、長谷寺に詣つとて、淀の渡りといふものをせしかば、舟に車をかき据ゑて行くに、菖蒲・菰などの、末短く見えしを取らせたれば、いと長かりけり。菰積みたる舟のありきこそ、いみじうをかしかりしか。「高瀬の淀に」は、これを詠みけるなめりと見えし。二日といふに歸るに、雨のいみじう降りしかば、菖蒲刈るとて笠のいと小さきを着て、腰いと高き男・童などのあるも、屏風の繪にいとよく似たり。

四

五月ばかり山里にありく、いみじくをかし。澤水もげにたゞいと青く見え渡るに、上はつれなく草生ひ茂りたるを、長々とたゞさまに行けば、下はえならざりける水の深うはあらねど、人の歩むにつけてとばしり上げたる、いとをかし。左右にある垣の枝などのかゝりて、車の屋形に入るを、急ぎてとらへて折らんと思

月のいと明かきに川を渡れば、牛の歩むまゝに、水晶などの割れたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。

七

降るものは雪。霰。霰はにくけれど、雪の真白にてまじりたるをかし。雪は、柏皮音きいとめでなし。少し消えがたになりたるほど。又、いと多うは降らぬが、互の目ごとに入りて、黒う真白に見えたる、いとをかし。時雨・霰は板屋。霜も板屋・庭。

八

にくきもの、急ぐことある折に、長言する客人。あなづらはしき人ならば、「後に。」など言ひても追ひやりつべけれども、さすがに心恥づかしき人、いとにくし。硯に髪の入りに磨られたる。又、墨の中に石こもりて、きし／＼ときしみたる。俄かにわづらふ人のあるに、驗者求むるに、例ある所にはあらで、ほかにある事ありぐほどに、待ち遠に久しきを、からうじて

待ちつけて、喜びながら加持せざるに、この頃、もののけに田じにけるにや、居るまゝに即ちねぶる聲にならる、いとにくし。

なんでふ事なき人の、すゑろにえがちにもものいたう言ひたる。火桶・炭櫃などに手の裏打ち返し、鼓押し延べなどしてあふりゐる者。いつかは、若やかなる人などの、さばしたりし。老いばみ、うたてある者こそ、火桶のはたに足をさへもたげて、もの言ふまゝに押しすりなどもすめ。

もの羨みし、身の上歎き、人の上言ひ、つゆばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、言ひ知らせぬをば怨じそしり、又、僅かに聞きわたる事をば、われもとより知りたる事のやうに、こと人にも語りしらべ言ふもいとにくし。もの聞かんと思ふほどに泣くちご。鳥の集りて飛びちがひ鳴きたる。

ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊の細聲に名のりて、顔のもとに飛びありく。羽風さへ身のほどにあるこそいとにくけれ。さしめく車に乗りてありく者、耳も聞かぬにやあらんといにくし。わが乗りたるは、その

車の主さへにくし。

物語などするに、差し出でて、われ一人さいまくる者。總べて、差し出では、童も大人もいとにくし。あからさまに來たる子供・わらはべをらうたがりて、をかき物など取らするに、ならひて常に來て居入りて、調度や打ち散らしぬる、にくし。今参りの差し越えて、物知り顔に、教へやうなること言ひ、後見たる、いとにくし。

蚤もいとにくし。衣の下にをどりありきて、もたぐるやうにするよ。又、犬のもろ聲に長々と鳴き上げたる、まが／＼しくにくし。

四 先 達 徒 然 草

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拜まざりければ、心憂く覺えて、或る時思ひ立ちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺・高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。

さて、かたへの人に會ひて、「年來思ひつること果し

侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごと山へ登りしは、何事かありけん。

ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」と言ひける。

少しの事にも先達はあらまほしきことなり。

二

能をつかんとする人、よくせざらんほどは、なまじひに人に知られじ、うち／＼よく習ひ得て差し出でたらんこそ、いと心にくからめと常に言ふめれど、かく言ふ人、一藝も習ひ得ることなし。未だ堅固かたほなるより上手の中に交りて、譏り笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎて嗜む人、天性その骨なけれども、道になづまず、みだりにせずして年を送れば、堪能の嗜まざるよりは遂に上手の位に至り、徳たけ、人にゆるされて、並びなき名を得ることなり。天下の物の上手といへども、初めは不堪の聞えもあり、無下の瑕疵もありき。されどもその人、道の矯正しく、これを重くして放埒せざれば、世の博士にて萬人の師となること、

諸道變るべからず。

四

貝を覆ふ人の、わが前なるをばおきて、よそを見渡して、人の袖の陰、膝の下まで目を配る間に、前なるをば人に覆はれぬ。よく覆ふ人は、よそまでわりなく取るとは見えずして、近きばかり覆ふやうなれど、多く覆ふなり。非盤の隅に石を立ててはじくに、向かひなる石をまぼりてはしくは當らず。わが手もとをよく見て、こゝなるひじりめを直ぐにはじけば、立てたる石必ず當る。

よろづの事、ほかに向きて求むべからず。たゞこゝもとを正しくすべし。清獻公が言葉に、「好事を行じて前程を問ふことなかれ。」といへり。世をたもたんだもかくや侍らん。内をつゝします、軽くほしきまゝにしてみだりなれば、遠き國必ず背く時、始めて謀を求む。「風に當り濕に臥して、病を神靈に訴ふるは愚かなる人なり。」と醫書にいへるが如し。目の前なる人の憂ひをやめ、恵みを施し、道を正しくせば、その化遠

く流れんことを知らざるなり。雨の行きて三三^{さんさん}を往せしも、師をかへして徳をしくにはしかざりき。

四

或る者、子を法師になして、「學問して、因果の理をも知り、説經などして世わたるたづきとせよ。」と言ひければ、教への女に説經師にならんために、先づ馬に乗り習ひけり。輿・車はまたぬ身の、導師に請ぜられん時、馬など通へにおこせたらんに、桃尻にて落ちなれば、心憂かるべしと思ひけり。次に、佛事の後、酒などすゝむることあらんに、法師の無下に能なきは、檀那すまじく思ふべしとて、早歌といふ事を習ひけり。二つのわざ、やう／＼さかひに入りければ、いよいよよくしたく覺えて嗜みけるほどに、説經習ふべき隙なくて年寄りにけり。

この法師のみにあらず、世間の人、なべてこの事あり。若きほどは諸事につけて、身を立て、大きな道をも成じ、能をもつき、學問をもせんと、行く末久しくおらます事とも、心には掛けながら、世をのどか

道なり。

、京に住む人、急ぎて東山に用ありて、既に行き着きたりとも、西山に行きてその益まさるべきことを思ひ得たらば、門より歸りて西山へ行くべきなり。こゝまで來着きぬれば、この事をば先づ言ひてん、日をさしぬことなれば、西山の事は歸りてまたこそ思ひ立ためと思ふ故に、一時の懈怠即ち一生の懈怠となる。これを惡るべし。

一事を必ずなさんと思はば、他の事のやぶるゝをもういたむべからず。人のあざけりをも恥づべからず。萬事にかへずしては、一の大事成るべからず。人のあまたありける中にて、或る者、「ますほのすゝき、ますほのすゝきなどいふ事あり。わたのべの聖、この事を傳へ知りたり。」と語りけるを、登蓮法師その座に侍りけるが、聞きて、雨の降りけるに、「簑笠やある、貸し給へ。かのすゝきの事習ひに、わたのべの聖のがり訪ね罷らん。」と言ひけるを、「餘りにもの騒がし。雨止みてこそ。」と人の言ひければ、「無下のことをも仰せらるゝものかな。人の命は雨の霽れ間をも待つものか

に思ひて、打ち怠りつゝ、先づ差し當りたる日の前の事にのみ紛れて月日を送れば、事ごととなすことなくして身は老いぬ。遂に物の上手にもならず、思ひしやうに身をもたず、悔ゆれども取り返さるゝ齡ならねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へ行く。

されば、一生のうちにむねとあらまほしからん事のうちに、いづれかまさとよく思ひ比べて、第一の事を案じ定めて、そのほかは思ひ捨てて、一事を勵むべし。一日のうち一時のうちに、あまたの事の來たらん中に、少しも益のまさらん事をいとみて、そのほかをば打ち捨てて、大事を怠るべきなり。いづ方をも捨てじと心に取り持ちては、一事も成るべからず。例へば、非を打つ人、一手もいたづらにせず、人に先立ちて、小を捨て大に就くが如し。それにとりて、三つの石を捨てて十の石に就くことは易し。十を捨てて十一に就くことは難し。一つなりともまさらん方へこそ就くべきを、すまでなりぬれば惜しく覺えて、多くまさらん石には換へにくし。これをも捨てず、かれをも取らんと思ふ心に、かれをも得ず、これをも失ふべき

は。われも死に、聖も失せなば、尋ね問きてんや。とて、走り出でて行きつゝ、習ひ侍りにけりとし傳へたるこそ、ゆゑしくありがたう覺ゆれ。「敏き時は則ち功あり。」とぞ、論語といふ文にも侍るなる。このすゝきをいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。

五

一道に携る人、あらぬ道のむしろに臨みて、「あはれ、わが道ならましければ、かくよそに見侍らじものを。」と言ひ、心にも思へること、常のことなれど、よにわろく覺ゆるなり。知らぬ道の淺ましく覺えは、「あな、羨まし。などか習はざりけん。」と言ひてありなん。わが智を取り出でて人に爭ふは、角あるものの角をかたぶけ、牙あるものの牙を噛み出す類ひなり。

人としては善に誇らず、物と争はざるを徳とす。他にまさるべきのあるは大きな失なり。品の高さにても、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽にても、人にまされりと思へる人は、たとひ言葉に出でてこそ言は

ねども、内心にそこばくの咎あり。つゝしみてこれを忘るべし。をこにも見え、人にも言ひ消たれ、禍をも招くは、たゞこの慢心なり。一道にもまことに長じぬる人は、みづから明らかにその非を知る故に、志常に満たずして、遂に物に誇ることなし。

六

平宣時朝臣、老いの後、昔語り、「最明寺入道、或る宵の間によばるゝことありしに、『やがて。』と申しながら、直垂のなくて、とかくせしほどに、また使來たりて、『直垂などの候はぬにや。夜なれば、異様なとも、とく。』とありしかば、萎えたる直垂、うちうちまゝにて罷りたりしに、銚子に土器取り添へて、もて出でて、『この酒を獨りたうべんがさう。』しければ、申しつるなり。さかなこそなけれ。人は静まりぬらん。さうぬき物があると、いづくまでも求め給へ。』とありしかば、紙燭さして、くまゝを求めしほどに、臺所の棚に、小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、『これを求め得て候。』と申ししかば、『事足り

なん。』とて、心よく數難に及びて奥に入られ侍りき。その世にはかくこそ侍りしか。』と申されき。

五 奥の細道

松尾芭蕉

門出

月日は百代の過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅を住みかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひ止まず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を拂ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そぞろ神のものにうきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて取る物手につかず、股引の破れをつくり、笠の緒附け替へて、三里に參詣するより、松島の月先づ心に懸りて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、草の戸も住み替る代ぞ鎌の家。表八句を庵の柱に掛けおく。彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて

白河

光をさされるものから、富士の峯がすかに見えて、上野・谷中の花の梢、またいつかはと心細し。睦まじき限りは宵よりつとひて、舟に乗りて送る。千住といふ所にて舟を上れば、前途三千里の思ひ胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそぐ。

行く春や鳥鳴き魚の目は涙

これを矢立の初めとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ち並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚、たゞかりそめに思ひ立ちて、奥天に白髮の恨みを重ぬといへども、耳にふれて未だ目に見ぬさかひ、もし生きて歸らばと定めなき頼みの末をかけ、その日漸く草加といふ宿にたどり着きにけり。

瘦竹の肩に掛れる物、先づ苦しむ。たゞ身すがらにと出で立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴衣・雨具・墨・筆の類ひ、あるはさがたき籠などし、なるは、さすがに打ち捨てがなくて、路次の煩ひとなれるこそわりなけれ。

心もとなき日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。いかで都へと便り求めしものことわりなり。中にもこの關は三關の一にして、風騷の人心をとどむ。秋風を耳に残し、紅葉を面影にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲き添ひて、雪にもこゆる心地をする。古人冠を正し、衣裳を改めしことなど、清輔の筆にもとゞめおかれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴れ着かな 曾、良

とかくして越え行くまゝに、阿武隈川を渡る。左に會津根高、右に岩城・相馬、三春の庄、常陸・下野の地をさかひて山連なる。かけ沼といふ所を行くと、今日は空曇りて物影映らず。須賀川の驛に等閑といふ者を訪ねて、四五日とゞめらる。先づ白河の關いかに越えつるやと問ふ。長途の苦しみ身心疲れ、且つは風景に魂奪はれ、懷舊に腸を斷ちて、はかしくしう思ひめぐらさず。

風流の初めやおくの田植うた

松島

抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭、西湖に恥ぢず。東南より海を入れて江の中三里、浙江の潮をたふふ。島々の數を盡くして、一時つものは天をさし、臥すものは波に腹ばふ。あるは二重に重なり、三重に疊みて、左に分れ、右に連なる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉潮風に吹き撓めて、屈曲のづからためたるが如し。その氣色蒼然として美人の顔を粧ふ。ちほやぶる神の昔、大山つみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆を振るひ言葉盡くさん。雄島が磯は、地續きて海に出てたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた、松の木陰に世をいとふ人も稀々見え侍りて、落穂・松箒など打ちけぶりたる草の庭靜かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懐かしく立ち寄るほどに、月海に映りて晝の眺めまた改む。江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて風雲の中に旅寝すること、怪し

ゆ。

三代の榮耀一瞬のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。先づ、高館に登れば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐるて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが舊跡は、衣が關を隔てて南部口を差し堅め、夷を防ぐと見えたり。さても、義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打ち敷きて時の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

會良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を残し、光堂は三代の栢を納め、三尊の佛を安置す。七寶散り失せて、珠の屏風にやぶれ、黄金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面新たに圍んで、甍を覆うて風雨を凌ぐ。しばし千載の記念とはなれり。

五月雨の降り残してや光堂

國文篇

きまで妙なる心地はせらるれ

松島や鶴に身をかれほとへさす

會良

手は口を閉ぢて眠らんとして驚ねられず。舊庵を別るゝ時、素堂、松島の詩あり。原安適、松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解きて今宵の友とす。且つ、杉風・濁子が發句あり。

平泉

十二日平泉と志し、あねはの松、緒だまの橋など聞き傳へて、人跡稀に、雄兎・鶴鹿の行き交ふ道そこどもわかず、遂に道踏みたがへて、石巻といふ湊に出づ。黄金花咲くと詠みて奉りたる金華山海上に見渡し、數百の廻船入江につどひ、人家地を争ひて竈の煙立ち續けたり。思ひかけずかゝる所にも來たれるかなと、宿借らんとすれど、更に宿賃す人なし。漸くまどしき小家に一夜を明かして、明くればまた知らぬ道迷ひ行く。袖の渡り、尾ぶちの牧、眞野の菅原などよそ目に見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩といふ所に一宿して平泉に到る。その間二十餘里ほどと覺

立石寺

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覺大師の開基にして、殊に清閑の地なり。一見すべき山人々の勧むるによりて、尾花澤より取つて返し、その間七里ばかりなり。日未だ暮れず。麓の坊に宿借りおきて、山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松栢年ふり土石老いて、苔溜らかに、岩上の院々扉を閉ぢて物の音聞えず。岸をめぐる岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寥として心澄み行くのみ覺ゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

最上川

最上川は陸奥より出でて、山形を水上とす。非點・畢などいふ恐しき難所あり。板敷山の北を流れて、果ては酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に舟を下す。これに稻積みたるをや稻舟といふならし。白絲の瀧は青葉の隙々に落ちて、仙人掌岸に臨みて立つ。水漲つて舟危し。

五月雨をおつめて早し最上川

象 潟

江山水陸の風光敷を盡くして、今象潟に方寸をせむ。酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を傳ひ、いさごを踏みて、その際十里。日影や、かななく頃、潮風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山隠る。暗中に摸索して、雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色また頼もしと、海人の苔屋に膝を入れて、雨の霽るゝを待つ。その朝、天よく晴れて、朝日はなやかにさし出づるほどに、象潟に舟を浮かぶ。先づ、能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、向かふの岸に舟を上れば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老い木、西行法師の記念を残す。寺を千満珠寺といふ。

この寺の方丈に坐して簾を卷けば、風景一眼のうちには盡きて、南に鳥海天を支へ、その影映りて江にあり。西はむやゝの關路を限り、東に堤を築きて秋田に通ふ道遙かに、海北に構へて渡打ち入る所を汐越といふ。江の縦横一里ばかり、而影松島に通ひて又異なり。松

島は笑ふが如く、象潟は怨むが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

汐越や鶴膝濡れて海涼し

六、固有の偉大さ

大地震以後、東京に高層建築の殖えて行つた速度は、かなり早かつたといつてよい。毎日その進行を側で見てゐた人たちは、それほどにも感じなかつたであらうが、地方から稀に上京する者には、それが顯著に感ぜられた。ちひ／＼高層建築が立ち並ぶに従つて、部分的には堂々とした通事も出来上つて來た。全體としては、恐しく亂雑な、半出來の町でありながら、しかも、どこかに力を感じさせる不思議な都會が出現したのである。

この復興の經過の間に、自分を非常に驚かせたものが一つある。二三年前の初夏、久しぶりに上京して、東京驛から丸の内の高層建築街を抜けて、壕側へ出た時であつた。お壕に面して新しい高層建築が立ち揃つてゐる。こゝがあの荒れ果てた三菱が原であつた時分

中等國語三

文部省

文部省調査局刊行認許贈

(中) ¥ 1.80

(11)